

シリーズ「アジアほっつき歩る記|第49回

バスから見るラオス

す が つとt **須賀 努**

コラムニスト・アジアンウオッチャー

ちょうど1年前、偶然にもタイのチェンコーンという街を訪れ、そこで旧正月休みにやってきた大量の中国ナンバーの車を見て、仰天した。それまでタイとラオスは渡し船で結ばれていたのが、友好橋と呼ばれる橋の完成により、一気にモータリゼーションが進展していった。そして何より、中国大陸からラオスを経由してタイへ、こんなにも簡単に車が走ってこれる道路事情は一体どうなっているのだろうか、という疑問が素直に沸いていた。

今回はそのチェンコーンから橋を渡り、ラオス側のファーサイ、中国国境へ繋がるルアンナムター、そして交通の要所、ウドムサイ、更にはラオス北部、中国国境にも近いポンサリーまでバスに乗って行ってみた。

道路が格段に良くなるラオス

タイ国境の街、チェンコーンとラオスのファーサイとの間に友好橋が架かったことは、周辺の交通事情を劇的に変えていた。中国ナンバーの車が続々とタイ側に入ってきていたが、彼らは何と雲南省の昆明や四川省あたりから車を飛ばしてきている。ラオ



写真 1 中国の支援でできたファ-サイの国境ビル

ス側に入っても 高速道路など、山道の 装された道路を 行くだけだが、 以前より相当な たと聞く。道路 たと聞く。道路 標識に中国語が書かれているのが、如何に多くの中 国人ドライバーがこの道を利用しているかを物語っ ていた。

以前は中国から道路整備の要請があっても断っていたラオス。それがここ2-3年で急激に道路が良くなったのは何故だろうか。現地では中国の支援で道路がどんどん整備されてきたと聞いていたが、中国の国有銀行幹部は、『中国はラオスにかなりの融資を行っているが、その返済は行われていない』と証言した。「返済がなくても、融資を継続するように政府から指示がある」との話もあった。これがラオスの道路が良くなってきた理由であろう。中国側にとって、国境を接していないタイへのルートは十分にメリットのあるディールといえる。

バスで3時間ほど行くと、ルアンナムターに出た。ここは中国国境方面と、人気の観光地ルアンプラバーンや首都ビエンチャンへ向かう起点となる街。ラオスではバスの本数は限られているので、次の大きな都市ウドムサイまでバスで2時間半の道のりを更に南下していった。因みに、ラオスのバスは車内は人と荷物が満載状態であり、快適とは程遠い過酷な環境なので乗車はお勧めしない。

中国語の街、ウドムサイ

夕方、ウドムサイに着き、手近なホテルに入って、英語で『今晩泊まれるか』と聞くと、フロントの若い女性は『あんた、何言ってるのよ、中国語を話しなさいよ!』と完璧な標準中国語で話してきて驚いた。彼女は華僑ではなく、雲南省からの出稼ぎ



撮影:佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。

金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の 駐在を経験。

現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆 活動に取り組む。



者だった。更に支払いは『現地通貨、人民元、それともタイバーツ? 米ドルはダメよ、流通が少ないんだから』と言うではないか。この街は中国とタイを結ぶ交差点、物流の拠点だったのだ。既にアジアの一部では米ドルの威力が落ちてきて、まさに人民元経済圏が確立されていることも実感できた。

夕飯を食べに街を歩くと『中国飯店』とか『重慶飯店』などの看板が目に付く。試しに重慶飯店に入ってみると、従業員はラオス人で片言の中国語しか話せなかったが、客が流暢な中国語で『メニューはないよ。中国語での注文は直接厨房でオーナーにするんだ』という。厨房で声を掛けると『一人なら回鍋肉か、麻婆豆腐かだな』と、四川から出てきたオーナーが答える。ここは中国の田舎と同じだ。おまけに店の前には四川ナンバーの車が停まり、3人の中国人が煙草をぷかぷかさせながら食事をしていた。

更には携帯電話の SIM カードを購入しようと、ショップを探すと、時間が遅かったので閉まっている店が多かったが、1軒だけ煌々と電気がついていた。英語で話しかけても、やはり中国語が返ってきた。この店は父親の代に商売のために雲南から出てきた一家が経営していた。『ラオス人はあまり働かないから、儲かる商売は皆中国人がやっている』という。彼らの店だけが開いている理由、そしてラオス人と中国人の労働意欲の違いもはっきりと理解できた。

ラオスは中国化するのか

同じ中国国境近いといっても北の果て、どんづまりにあるポンサリーまで行くと、活気のない静かな街

であった。バスで会った唯国人は中国人は中国となる水は中国との関係をでいる。『もうすにの辺の村にも



写真2 ポンサリー行きのバスに 乗り込む

すべて電気が行き渡るよ』と、誇らしげに語る彼の 顔には、中国のラオスへの経済進攻、という文字は 浮かんでいなかったが、何となく複雑な思いだっ た。

街で出会った貴州省から来た商人は『あのまま中国に残っていたら』とは考えないらしい。あれだけ発展した祖国が羨ましくはないか、と聞くと『たとえ国が発展しても、一般庶民が恩恵を得られることは殆どない。だったら小さいながらも自分の店を持ち、子供も不自由なく育てられる今の環境で満足すべきだ』ときっぱり言ったその言葉に、中国という国の大きさ、所得格差の現実の一端が見られた。

人口僅か700万人の小国ラオスは、はた目には今や、中国に飲み込まれようとしているように思えてならない。だが、バスに乗っていたラオス人にそのことを聞いてもあまり危機感はなかった。『国がどうなろうと庶民には庶民の暮らしがあるだけ』というのはどこの国でも同じだろうか。いやこの辺りではむしろ、国という概念が出来たのが新しいのかもしれない。今回のバス旅では、どんな権力者が支配しても自分たちは変わらない、というある意味でラオス人の何物にも負けない強さを知る機会となった。